

どんぐり

No.48



兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

(Nature Education Center)

(日本固有種のアオケラ)

今にして思う



兵庫県立南但馬自然学校

副校長 川上 教朗

通学路と言うようなものには在って無いようなものだった。学校から自宅までの時間は、登校時間の何倍もの時間がかかった。山には秘密基地があり、気心の知れた仲間がいた。時には陣地取りと称して喧嘩の始まることもあった。ただし、引き際はわきまえていた。時として鯉の泳ぐ小さな川は、にわか川漁師たちの活躍する場所になり、時には笹舟のレース場にもなった。泥のこびりついた頭髮や顔や服は、下校中の勳章でもあった。一面に広がるれんげ畑は、むせるような土のおいと可憐な花の香りで包み込んでくれた。視線の先には汗と土と埃にまみれて

黙々と働く大人たちの姿があり、ひばりのさえずりに合わせて群れ飛ぶ紋白蝶がいた。小さなお地蔵さんの下から湧き出る甘く清冽な水で喉の渴きを潤し、小腹の減りは木の実や果実が慰めてくれた。「早よ帰らんとお母ちゃんが心配しとるぞ」。野太い声の主の、いかつい姿にはいかにも不釣合いな慈愛に満ちた眼差しがそこにはあった。心配している母を思う子どもの心はうずき、子どもたちを走らせ、笑顔の中へ帰らせる。遊び呆ける子どもたちを家路へと向かわせる言葉としては効果てき面言葉だった。

自然の中で、その息吹を感じ、恵みをもらい、感性を磨き磨かれ、幼い好奇心や探究心・冒険心を更に膨らませ、仲間意識を育て、明日を夢見る心を養っていく。地域の人々の愛情は、地域の良さを自ら発見する原動力になり、誇りに思い、大切に思う心を培っていく。もちろん、そうとは知らないうちに……。まさしく、ごく自然に……。『道草を食う』何と面白い言葉だろうと今にして思う。

子どもたちのこれからの長い学校生活や人生に、現在の社会情勢を重ね合わせて思いを馳せる時、自然学校での体験はあまりにも貴重な時間だと思えてならない。10数年前に並木として植樹されたメタセコイアは、大地にしっかりと根を張り、真つ直ぐな幹は天を突き、枝葉を茂らせて、今、若いながらも堂々とした風格を持つて子どもたちを迎えている。「かくあれかし」、そんな願いが聞こえてくる。

今、ここに上梓された機関紙「どんぐり第48号」は、昨年神戸で開催した自然学校フォーラムのプログラムの内、明石市立魚住小学校の河合先生に実践発表をしていただいた内容をまとめたものです。

当該校の先生方をはじめ関係の皆様は改めてお礼を申し上げますとともに、ご高覧いただく皆様にとりまして貴重な参考資料とならんことを祈念しております。

多くの先生方も、瞳を輝かせて自然学校の思い出を語ってくれる。「夢を伝えたい」、そんな思いが響いてくる。

すぐには結果の出ない体験活動ではあるが、それ故に本校の使命の重さを思う。それは、単なる「道草」ではなく、進取の気鋭と鋭敏な感性を基に理論的に体系化され、創意工夫の凝らされた体験活動であり、子どもたちの内面に濃密に迫るものである。

『自然学校における ねらい設定と活動実践』

自然学校・体験活動フォーラム実践発表より

明石市立魚住小学校教諭

河合 健次



■魚住小学校の 自然学校におけるねらい

高学年の仲間入りをした子ども達の担任になり、私たちはこの1年間どのような道筋をたてて子ども達と関わっていくか、そしてどのような集団に育てて送り出すのか、明確なビジョンを持たなければなりません。そのビジョンとは、一つは「まとまりのある学年集団」であり、もう一つは「積極性のある学年集団」です。学年という集団の中で、仲間を思いやったり、自分の言動に時にはちよつと辛抱することを学ぶことは、その集団をより高いレベルに持ち上げる大切な事です。ですから、自我や自己主張の高まりが「自己中心的」となって表面化する傾向を強める時期に、周りのことを考えられる雰囲気を持った集団に育てていくことは何よりも大切なことであり、



お互いを認め、支え合うことで集団として大きな力を発揮することになるはず。そして、魚住小学校のリーダーとして積極的な雰囲気を持った集団、その時その時

の場面で気持ちや力を一つに合わせられる集団、そんな集団の育成が我々の1年間のテーマであり、自然学校をはじめ、どんな行事等においても「仲間づくり・集団づくり」に主眼を置いた学年経営を第一に考えました。その上で、自然学校のねらいについても、次のように設定しました。

- ①「自然に関心を持ち、自然から学ぶ」
- ②「自然の中で仲間と存分にふれあい、助け合いの心を育成する」
- ③「考えて、最後までやり抜く力を育てる」

■プログラムの 具体化について

これらのねらいに迫るプログラムとして今回の自然学校は、「仲間づくり・集団づくり」と「自然から学ぶ」という2本の柱により構成することになりました。自然学校全体、つまり6日間のプログラムを考える場合には「自然から学ぶ」を主軸に置いて構成することを考え、基本的な1日の生活や細かなプログラムをサポートする側面において、「仲間づくり・集団づくり」の要素を取り入れて考えようと思いました。

■自然から学ぶプログラム

環境教育の必要性やその重要性は、今ここで言うまでもないと思いますが、ここで大切にしたいのは、知識が活動を促すのを期待するのではなく、体験活動が後に知識やより深い感性をもたらすことへの期待です。ですから、今回のプログラムは、教室の中で学べることは自然学校の後に回して、まず森の中で体験できる学習活動を考えようと思いました。

自然学校のメインプログラムは、2日目から5日目までを通して、「里山づくり」体験をプログラム化させて、「健康な森づくり」とネーミングしました。〔図1〕
南但馬自然学校では、人の手が

行き届いた健全な森と、手つかずの自然が残る森、あるいは杉や檜など針葉樹が主体の森と、いろいろな広葉樹が混在している豊かな森に出会います。このフィールドの中で「何を何のために」するかを考えたと、ただ自然をフィールドにしただけの遊びに終始するのではなく、自然との共存・共生を考えさせるプログラムにしたいと考えました。そこで思いついたのが「里山づくり」体験です。5年生という年齢の子ども達にとって、「森を大切にしよう」という感覚と「木を切り倒す」という行為は相反することと考えるでしょう。しかし、実際には、森は人の手で「間伐」という作業をしてやらなければ健康な状態で育ちません。自然を大切にすることがために自分は森に関わらないのであれば、それ



図1 「健康な森づくり」の構想図

は傍観的・消極的な姿勢でしかありません。しかし、自ら森に入っ
て、「間伐」を行うという行為は、
自然保護の積極的な姿勢として評
価できます。そして、なぜそうし
なければならぬのかを学び、考
えることは、まさに自分と自然と
の共生を考える大きな一歩です。
ただ、「間伐」したことで満足、
で終わってしまうと、これは、森
を大切にしたことになるけれども、
他方で切り倒した木の命につい
ては、「見捨てられた存在」として済
ましてしまうこととなります。子
ども達には、そういう感覚で間伐
された木を見捨てさせてはならな
いのではないか、この思いは間伐
材の再利用とその手段としての
「染め木」ということに結びつき
ました。間伐材を自然からの恵み
としてとらえ、染め木にすること
で新たな命を吹き込み、それを材
料に「トーテムポール」の制作へ
と結びつけようと考えました。
さて、これで「間伐」から「間
伐材の再利用」「染め木材で共同制
作」という流れができました。次
に大切なことは、自然に対する畏
敬の念と感謝です。5泊6日を過
ごした南但馬自然学校の森に対し
て感謝の気持ちを活動に入りたい
と考えました。それが「植樹」で
す。こうして、「健康な森づくり」
のストーリーができました。

〔図2〕

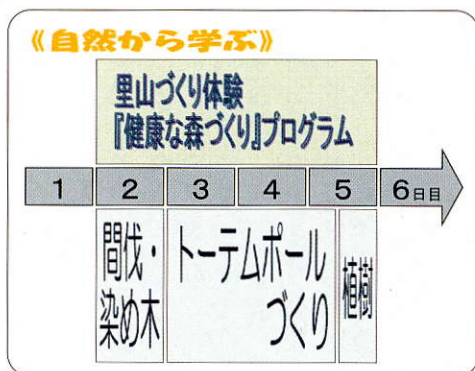


図2 「健康な森づくり」の流れ

■ 「染め木」とは…

里山体験に間伐材の再利用とい
う要素を取り入れるために兵庫教
育大学の森岡茂勝教授が長年研究
されている『間伐材の再利用とし
ての染め木とその教材化』に注目
し、森岡先生に御指導をいただき
ました。「染め木」とは文字通り
「木を染める」ことです。木に着
色するというと、表面にペンキな
どの塗料を使って着色することが
思い浮かぶところですが、それ
は、木の内部、年輪や節といった
ものの美しさが見えてきません。
そこで、木の内部から染色し、木
を切断、または削ることで着色さ
れた美しい木の年輪などの表情を
見出していくわけです。そこで、
木が持つ生きていくための活動、
つまり光合成を利用します。根元

から切り離された木でも、バケツ
の水の中に幹を立てかけておけば、
光合成のエネルギーでその水を木
のてっぺん、葉の一枚一枚まで吸
い上げることが出来ます。です
から、様々な色の染料（今回は安全
や環境に配慮し、昔から使われて
いるお餅やお菓子などに入れる食
用色素を使用）を混ぜた色水を吸
い上げさせることによって、木の
内部から染めることができるわけ
です。子ども達は間伐すべき木を
森岡先生に教えてもらい、それを
切り倒し、そして新たな命を吹き
込む活動として「染め木」を行
いました。



■ 染め木で

トーテムポールの制作

染め木となった杉の間伐材を材
料に3日間かけて子ども達は
「トーテムポールづくり」に挑戦
しました。大きさは1本約2m 50
cmほど。ただ作ると言っても、あ
らかじめデザインを考えてきたわ
けでもなく、ノミやのこぎり、小



刀、きりなど普段使い慣れていな
い道具を駆使しなければならぬ
わけですから大変な作業です。子
ども達は興味津々で染め木と向
かい合いました。まずはみんな
渡された杉の木の皮むきを始め
ます。皮をはがすと赤や青、緑に
オレンジ、紫といった色鮮やかな
木肌がでてきました。その時子
ども達は、初めて見る染め木の
鮮やかさに一瞬息をのみ、驚き
の声をあげました。木の幹を
ノミで削っていくと、より一層
色鮮やかに染め上がった年輪
や節の濃淡が見えてきます。
のこぎりや小刀を使って先端
まで染め上がった小枝を輪切
りにしたり、とがらせたりして
いろいろなパーツを作ってい
きます。のこぎりで切ったとき
にでてくる木の粉も色鮮やかに
染まっています。次々に新しい
発見があり、どんどんトーテム
ポールの顔の表情のイメージが
膨らんでいきます。こうして慣
れない道具に四苦八苦しな
がらも、5日目の午前中には
どの班も完成までたどりつ
き、発表会では一班ずつ自分
たちのトーテムポールを披露
することができました。

「植樹」の体験

5日目の午後は、「植樹」です。「健康な森づくり」プログラムの仕上げです。トータムポールが完成したところで自然学校が終わり、後かたづけをして南但馬自然学校を後にするのは「何か違うな」という思いがありました。もう一度森の中に入って、南但馬自然学校の森に感謝の気持ちを表せないか、そこで考えついたのが「植樹」でした。下見の時にこのことを伝えたところ、南但馬自然学校から植樹場所の確保とコナラの苗木の提供、そして、ひょうご森のインストラクター会会長の矢野進治先生への講師依頼等の配慮をしていただくことができました。子ども達は20本の木を間伐し、20本の染め木のトータムポールを学校に持ち帰りました。そして、その森からの贈り物に対して、感謝の気持ちを込めて20本の苗木を植樹するという体験で締めくくることができたのです。

「振り返りの時間」の設定

次に「仲間づくり・集団づくり」をプログラムにどう組み込んだのか説明します。まずは、班で共同制作する「トータムポールづくり」です。これは、「自然から学ぶ」において大きな意味を持つ活動とし

て位置づけたことは先に述べたとおりですが、同時に「仲間づくり・集団づくり」においても大きな意味を持っていました。

「トータムポールづくり」の初めは染め木の美しさに魅了され、道具を使う楽しさを味わうことから子ども達はやる気満々でした。しかしながら、やはり道具を使いこなす難しさや、同じ班のメンバーとの意見の衝突などから、だんだんと気持ちの中をしんどさが支配してきます。それが2日目、3日目と日を重ねると様々な障壁となり、時にはけんかなど険悪な雰囲気になることも考えられます。わたしたちが班活動として、このトータムポールづくりを設定したのは、この壁をいかに自分たちで解決し乗り越えていくかが、「仲間づくり・集団づくり」の上で重要な意味を持つと考えたからです。そして、その壁を乗り越えていくことで、仲間割れのピンチも仲間づくりのチャンスとして生かすことができなかつたか工夫したのが毎日の「振り返りの時間」の設定です。〔図3〕

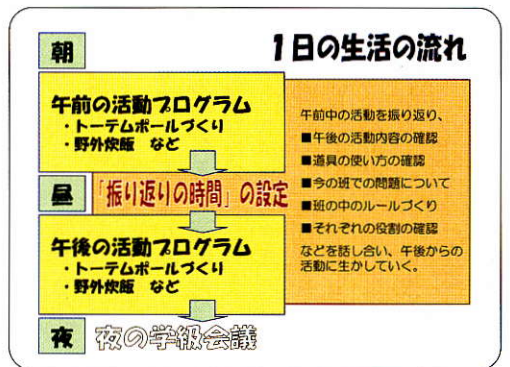


図3 「振り返りの時間」の設定

解決するか「班の中のルールづくり」等話し合うのです。腹を立てている者がなぜ怒っているのか、泣いている者がなぜ泣いているのか、班長が責任を感じてしまっていることは何なのか、みんな考えていたり、お互いのことに気づいたり、そのプロセスが人間関係に更なる深まりをもたらすことへの期待が、この「振り返りの時間」の設定理由です。実際、仲間割れした班もありました。班長が一番わがままを言って班のメンバーがついていけなくなった班もありました。しかし、教師やリーダー達の積極的な、あるいはやや強引と思えるような関わりがなくとも、子どもたちは自分たちで何とかその壁を乗り越えて「班で協力する」という目標を達成することができました。

仲間づくりを意識した様々な工夫

「トータムポールづくり」と毎日の「振り返りの時間」の設定は、様々な体験をすることから生まれた発見や課題を、仲間と共に考え分析し、気がついたことを共有化させながら仲間意識や集団力を高めていくという点で、ねらいに迫る重要な活動でした。また、これ以外にもこのことを意識した工夫を考えました。〔図4〕

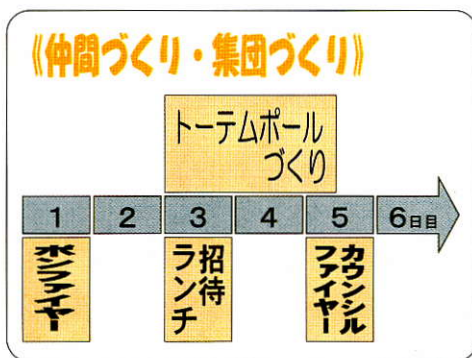


図4 「仲間づくり」の流れ

それが、2つの「キャンプファイヤー」の設定です。1日目の夜のボンファイヤーは、ふくらむ不安や緊張の糸が張りつめていく子ども達の気持ちを解きほぐすような「アイスブレイク」をねらいました。セレモニータの要素を一切入れない、盛大に楽しむ時間を仕掛けました。そして、最後の夜は、

それぞれが自然学校を静かに振り返り、仲間への感謝、リーダー達への感謝、そして仲間と自分のがんばりを認め語り合う、「カウンシルファイヤー」として設定しました。

また、野外炊飯は、2クラスずつに分かれて、調理をして招待する側と招待される側に分かれる「招待ランチ」の形式を取り入れました。お互いに招待しあうことで、子ども達のモチベーションを高め、招待する者は「おもてなし」の気持ちを、招待される者は「感謝」の気持ちを持つてくれることを期待しました。

■ 専門家の招聘

自然学校では、自分と班やクラスや学年の仲間、自分と指導補助員のリーダー達、そして自分と南但馬の自然：といった「自分と他者との関わり」が大きなコンセプトとなります。他者のすばらしさを発見したり、感動を分かち合ったりする。そんな心のふれあいを通して他者への感謝の気持ちや自己の成長に気づくことへの期待です。その一環として、この自然学校においては多くの専門家の方々をゲストティーチャーとして招聘しました。森と染め木と木工クラフトの専門家として、兵庫教育大学の森岡茂勝先生。また、地元但馬の民話や音楽に触れるプログラ

ムでは、和田山郷土博物館館長の柴田東一郎先生をはじめとする4人の方々。さらに植樹ではひょうご森のインストラクター会会長の方野進治先生をお招きすることができました。それぞれご自身の専門性を生かして的確な指示や貴重なお話をしていたいただければかりでなく、やさしい眼差しと語り口によつて子ども達の緊張をほぐしていただいたり、がんばろうとする意欲を高めていただくことができました。

■ 自然学校の その後の学習への繋がり

自然学校の担当になって、年度始めに南但馬自然学校での事前説明会に参加したときに、「自然学校が活動の羅列になって『体験だけの学習』にならないようにすることが大切だ」というアドバイスをいただきました。5年担任の全員で「何のためにするか」と「学校の学習活動にどう結びつけていくか」を考えました。その結果が「健康な森づくり」プログラムです。子ども達は教室での事前学習はほとんどせずに自然学校に参加しましたが、貴重な体験活動を経験しました。そしてその後、様々な教科での学習の中でその経験、知識を確かにしていきました。

「健康な森づくり」プログラムで

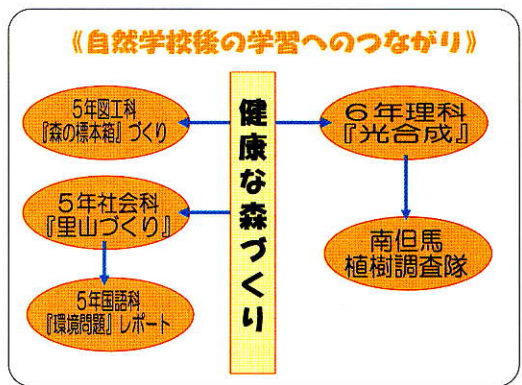


図5 自然学校後の学習へのつながり

子ども達自身が間伐し染め木にした間伐材は、理想的な森の構成を学習できればいいなと考え、栗の木やリョウブといった里山に自生する「雑木」と呼ばれる様々な広葉樹の小径木を選びました。それから染め木にした間伐材は、図工の時間に染め木以外の自然素材と合わせて「森の標本箱」をつくり、図工展で保護者や全校生に披露しました。たくさん種類のそれぞれ異なる個性豊かな木の表情、堅さや木の香りの違いに気づいた子ども達もたくさんいました。たくさんさんの木が混じっていることから木の種類や名前に興味を示した子どももいました。単なるものづくりで終わらず、様々な興味の引き出しができたように感じられました。

5年生の社会科では、3学期の

単元で環境保全を扱い、教科書の中でも「里山づくり」を扱っています。子ども達はこの単元の学習をするときには、自然学校での「健康な森づくり」プログラムの一部始終を思い起こし、その経験から確かな知識へと結びつけることができました。また、そこから地球温暖化や砂漠化の問題など更なる環境問題へと学習を深めていきました。国語科での研究レポートの学習において自分の調べたことや自然への思い、考えをまとめることができました。

6年生の1学期には理科で植物の「光合成」について学びます。自然学校で染め木になる過程を経験した子ども達でも、なぜ木のとっぺんまで染め上がるのか、そのメカニズムをはじめ理解できたのは6年生のこの学習ということになるのですが、ここでただ「光合成」という知識だけを注入されることから理解するのでは大きな違いがありました。価値ある体験に基づいた学習への発展として実を結んだ例と考えます。

■ 「南但馬植樹調査隊」 の結成

この光合成の学習では予想外の展開もありました。6年生の7月上旬にこの学習を教室でしていたときに、子ども達の頭の中には自



然学校での思い出がよみがえったのでしよう。自分たちが植樹してきた苗木に対する想いがよぎり、その苗木達の成長が気になりだしたようです。夏休み目前の時期でしたが、「南但馬自然学校のあの苗木たちを見に行きたい」と言うのです。早速、南但馬自然学校に許可をいただき調査隊を結成しました。そうして、8月の猛暑の中、電車を乗り継ぎ2時間、徒歩で1時間歩いて南但馬自然学校を再び訪れました。しかもうれしいことに1年前の自然学校で植樹の指導をしていただいた矢野先生が子ども

も達の到着を待っていてくださった。懐かしい再会と共に一緒に植樹した現場まで行きました。子ども達が1年前に植樹した苗木達はスクスクと無事に育っているものもあれば、残念ながら枯れてしまっているものもありました。そういう現状を観察した後、矢野先生の御厚意で10本のクルミの苗木を補植させていただきました。矢野先生には「次に来るときも必ず来てあげるから連絡してね」と言っていたが、子ども達もとても喜びました。こんな貴重な体験を誰が予測したことでしょうか。改めて自然学校での体験学習の重要性と人との関わり大切さを子どもと共に実感しました。

■ 自然学校の その後の児童の姿

今では子ども達は、行事のたびに編成される実行委員会に高い興味を示します。子ども達の中には、実行委員会という少し高度なイメージよりもむしろ、やる気を起こせば誰でも活躍できるというイメージが強いように思います。自然学校の前には、学年の合い言葉として「自然学校スローガン」をつくりました。それは4つの「ゆう」と発音する漢字（遊・優・結・友）から1つずつ各クラスで合い言葉を考え、学年全体に提案しました。このときに「こんな自

然学校にしたい」「みんなで作つくたい合い言葉を大切にしよう」と訴える自分たちの代表の姿を見て、同じように自分も学年を代表する実行委員会にチャレンジしようとする傾向がより強くなってきたことは一つの成果といえます。実行委員会などがいつも一部の子ども達の定位置ではなく、その時その時、たくさんの子どもが積極的に立候補してくれます。そして、選ばれた子どもはその責務を一生懸命に果たそうと努力します。その姿は様々な場面で、学年全体がいもムードをつくり、最高学年として下級生達のいいお手本となってくれています。

自分と他者との関わりから学ぶという姿勢については前述したとおりですが、これは本校の「総合的な学習の時間」を推進していく大きなテーマでもあります。自然学校で多くのゲストティーチャーから様々なことを学ぶ姿勢と人間的なふれあいを大切にする心の育成は、その後の学校での学習の場でも生かされています。地域の農家から学ぶ。地域の高齢者から縄ないとしめ飾りの作り方を教わる。家族に感謝の気持ちを込めてつくってお弁当学習など、家族や地域の人々とのふれあいを通して、受け身としてだけでなく積極的に大切なことを学び、また感謝の気持ちで締めくくることを体験しています。

■ おわりに

今回発表させていただいた自然学校は平成16年9月に実施したものですから、今では子ども達は卒業を目前に控えた6年生です。自然学校を終えてから、今日までに子ども達がどう変容しているか振り返ってみますと、もちろん自然学校終了後直ちに、学年全体が私たちの期待していたとおりにガラッと変容したかということはありません。しかしながら、少しずつ少しずつ、子ども一人ひとりの成長ぶりが垣間見られるようになったのではないかなと思います。自然学校だからといって、ただ単に自然に飛び込み体験をしたのではなく、様々な方々のお力添えをいただきながら、その後の教科学習や日常生活に発展させることができました。今回の発表を子ども達にとって価値ある体験活動の一考察として留めていただけたら光栄に思います。ありがとうございました。

※この実績発表は平成18年1月に開催した「自然学校・体験活動フォーラム」の実践発表で河合先生に発表いただいたものを抜粋して掲載しました。

南但馬自然学校
歳時記

ノスリ

「馬糞それともダイヤモンド?」

兵庫県立南但馬自然学校

増田 克也



「朝来山麓を飛ぶノスリ」

みなさんはタカをご覧になったことはありますか?数が少ない上、警戒心が強いために簡単に見ることはできませんね。冬になると本校周辺には、タカの種類であるノスリが少数ながら越冬のためにやって来ます。ノスリに出会うには、少しばかりコツが必要です。見晴らしがよさそうな木や電柱にとまっていなにか、ひとつひとつ探してみてください。一度見つけると、その穏やかな表情からもみてとれるように、比較的他のタカより警戒心が強くないので、珍しい猛禽類をじっくり観察する絶好のチャンスです。

大きさはトビより小さくカラス大で、褐色の背中を見るとうっかりトビと間違えそうになりますが、お腹はクリーム色で、羽の内側に至っ

ては更に白く、ひとたび飛べばトビとの違いは歴然とします。普段は農耕地周辺の木や電柱のてっぺんに陣取り地上に目を光らせ、ネズミやモグラ等の小動物を待ち伏せして狩っていますが、付近に適当な待機場所がない場合には、小刻みに羽ばたいてホバリング(停止飛行)を行い獲物がけて一気に急降下し捕らえます。ノスリは風を自在に操ります。ときには風をとらえ、一切羽ばたきをせずホバリングをすることもあり、まるで羽の内側に風を蓄えているかのようにふんわり空中に浮かんだ姿は、糸をピンと張りつめた奴隷を想像させます。

ノスリという名前の由来は、「野をするように飛ぶ鳥」から来ているようですが、所により地方名が付けられています。調べてみると「しまたか、いなぐり、いそたか、のずこ」等と様々ですが、主に関東地方ではノスリを「まぐそだか(馬糞鷹)」と呼んでいます。その昔、農耕に牛馬が使用されていたころ、道端の至る所に転がる、さして珍しくもな

い馬糞になぞらえて付けられた名前でしょう。馬糞と同格とは、ノスリたちにとつて全くありがたない名前ですが、その地ではそれほど多くのノスリが生息し、人々の生活に密着していたことがその名前からうかがえます。

一方、本校の周辺での渡来数はどうかというと：残念ながら一冬に1〜2羽見かける程度です。では地方名はどうでしょう?私はノスリを方言で呼んだ記憶はありませんので、地区の古老を始め、いろいろな方にノスリの写真を見てもらい名を尋ねてみましたが、標準和名はともかく地方名を口にする人はいませんでした。これはノスリが当地では数少ない渡り鳥である裏付けでしょう。

もし、私に当地のノスリたちの名付け親になる機会が与えられたらば「馬糞鷹」どころか、希少価値が高いキラキラ輝く「ダイヤモンド鷹」と命名することでしょう。

いんいめーしょん

親子で
南但馬を楽しみませんか

●第2回親子で自然学校

期 日	平成 19 年 2 月 24 日 (土) ~ 2 月 25 日 (日) 1泊 2日
対 象 者 員	県内の小学生とその保護者(子どもだけの参加は不可) 親子 10 組
参 加 費	一人あたり 4,000 円
申 込 方 法	申込書を郵送、ファクシミリ (申込書は電話にて御請求ください)
申 込 締 切 日	平成 19 年 2 月 9 日 (金) 必着
内 容	1 日目: 親子でゲーム、草木染め、 影絵で語る但馬の民話 2 日目: 冬山トレッキング、恐竜鍋を作ろう

●第3回親子で自然学校

(ひょうごユースセミナースプリングスクール)

期 日	平成 19 年 3 月 24 日 (土) 9:30 ~ 16:00
対 象 者 員	県内の小学生とその保護者(子どもだけの参加は不可) 親子 10 組
参 加 費	一人あたり 1,000 円 (昼食代含む)
申 込 方 法	申込書を郵送、ファクシミリ (申込書は電話にて御請求ください) ※ひょうごユースセミナーの申込書でも申し込みます。
申 込 締 切 日	平成 19 年 3 月 14 日 (水) 必着
内 容	親子で自然物クラフト (焼板) アウトドアクッキング (棒焼パン)

参加申込等のお問い合わせは
南但馬自然学校指導課まで ☎ (079) 676 - 4731